

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 30 年 5 月 30 日現在

機関番号：11301

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2014～2017

課題番号：26370003

研究課題名(和文)西洋古代の魂不滅説・滅亡説の論拠・含意に関する哲学的研究

研究課題名(英文)A philosophical study in arguments for and implications of ancient views for and against the imperishability of the soul

研究代表者

荻原 理(Ogihara, Satoshi)

東北大学・文学研究科・准教授

研究者番号：00344630

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,700,000円

研究成果の概要(和文)：西洋古代における、“人の魂は人の死後も存在し続ける”とする説(プラトンら)、“人の死にさいしてその魂は滅亡する”とする説(エピクロス派、ストア派ら)、“人の死にさいしてその魂の一部は滅亡し、一部はある形で存在し続ける”とする説(アリストテレスら)を、その論拠と、その説を奉じることが奉じる人にとってもつ含意とに即して、哲学的に解明した。主要な成果は、プラトン『パイドン』の最終論証の論拠の、ソクラテス、ケベス双方の思考に即しての解明である。この研究は2016年IPS大会で発表され、選抜論文集収録が決定している。プラトンに重点を置いた。アリストテレス、道徳的实在論などをめぐっても研究成果を発表した。

研究成果の概要(英文)：Some ancients (e.g. Plato) claimed that one's soul survives one's death; others (e.g. Epicureans and Stoics) denied it; and others (e.g. Aristotle) claimed that part of one's soul survives. In this research project, I considered arguments for, and practical implications of, some of those claims. The main result is my paper read at Symposium Platonicum (International Plato Society) in Brasilia in 2016, which is to be included in Selected Papers (Academia Verlag). There I examined Socrates' final proof of the imperishability of the soul in Plato's PHAEDO, not only as Socrates means it but also as Cebes understands it. In this research, on the whole, my focus fell on Plato, but I also considered Aristotle, moral realism in general, and other topics.

研究分野：西洋古代哲学

キーワード：西洋古代哲学

### 1. 研究開始当初の背景

西洋古代の魂論は哲学研究の場で、倫理学、認識論、自然学、形而上学との関連で様々に解明されてきているが、“人の死後もその魂は存在し続けるか”という問題は、(今日、全世界的に主流の観のある)分析哲学的アプローチにおいては、正面から扱われることは少なかった。それは一つには、人の死後その魂がどうなるかは、ある意味できちんと確かめるすべのない事柄だと思われるからであろう(その思いを研究代表者も共有する)。関連するもう一つの理由として、もし哲学を理性の営為として、理性だけでは片付かない事柄に関わる宗教(信仰)と対比するのならば、“魂は不滅か滅亡するか”の問題は哲学ではなくむしろ宗教(信仰)の領域に属すると見なされうるということもある。

だが、“魂は不滅か滅亡するか”の問題を哲学の埒外のものに見なすことはできない。なぜなら第一に、魂不滅説にせよ魂滅亡説にせよ、部分的不滅説にせよ、それぞれを唱える哲学者は自説の\*論拠\*を提出しており、これについて哲学的検討の余地があるからだ(実際この検討はこれまでも必ずしも十分とは言えないものなされてきた)。第二に、死後に\*自分は\*どうなるかについての人の思いは、その人の生き方や、さまざまな事柄に対する態度と関連し合っている。つまり、魂の不滅説や滅亡説の、これを奉ずる者にとっての\*含意\*について哲学的に考察する余地があるのだ。

研究代表者はこれまで、“いかに生きるべきか”についての西洋古代の諸説を、プラトンとエピクロス派に重心を置きながら哲学的に考察してきた。その背景を活かして、西洋古代における魂不滅説・滅亡説の論拠・含意の哲学的研究に着手した次第である。

### 2. 研究の目的

西洋古代における、“人の魂は人の死後も存在し続ける”とする説(プラトンら)“人の死にさいしてその魂は滅亡する”とする説(エピクロス派、ストア派ら)“人の死にさいしてその魂の一部は滅亡し、一部はある形で存在し続ける”とする説(アリストテレスら)を、その論拠と、その説を奉じることが奉じる人にとってもつ含意とに即して、哲学的に解明すること。

### 3. 研究の方法

プラトンに重点を置いた。その考察が格別実り多いと期待されたからである。

また、「研究の目的」で掲げた点の解明に寄与すると期待される事柄は、魂不滅説・滅亡説と直接の関連が薄いと思われる場合にも、ためらわずに考察した。魂の不滅・滅亡は、それだけに注視していると発想が閉塞的になりがちであり、様々な視点を動員して遠巻きに攻めていくことが大事だと思われたからだ。

中心的な研究作業は三つある。第一に、古代の関連するテキストの読解と、そのテキストをめぐる哲学的思考である。関連する二次文献を調査・収集しこれを検討することは言うまでもない。中心的な第二の研究作業は、他の研究者との意見交換である。内外の研究者と、電子メールで、あるいは直接会って議論を重ねたり、討議のための研究会に参加したり、講演会で講演したり学会で発表したり、発表はせずに講演会、学会に参加したり、シンポジウムを開いたりして、意見交換を行なった。研究作業の第三の中心は、研究成果の文字媒体としての発信である。

### 4. 研究成果

重要な順に列記する。

(1)プラトン『パイドン』におけるソクラテスによる魂不滅の最終論証がどれだけの根拠を持つのかを、ソクラテスと、対話相手であるケベス双方の思考に即して解明した。ソクラテスにおいては、“魂が消滅するとしたらそれは、魂が死ぬことによってでしかありえない”という前提が機能していたとするD・フレーデ、セドリーに基本的に賛同する。ケベスの側については、『パイドロス』の魂不死論証やアルクマイオンに繋がる思考(魂は自らに生命を供給することをやめないとする)がなされていた可能性を示唆した。これは106d2-4のケベスの謎めいた応答を説明する独創的な解釈である。この英語論文は国際プラトン学会大会で発表するための審査を通過し、発表原稿集に収録され(図書)2016年7月、ブラジル、ブラジリア大学での同大会の平行・セッションで発表され(学会発表)同月、改訂稿がブラジル、サンパウロ大学で、招待講演として読まれた(学会発表)。また、アカデミア出版の、国際プラトン学会大会選抜論文集収録のための審査を通過し、収録が確定している(図書)。

(2)科研最終年度の終り近い2018年1月に東北大学にて、科研を総括する国際シンポジウム‘Symposium on Plato’を開催した。

研究代表者が「プラトン『国家』における、教育と関連する強制」と題する英語講演を行ない(研究発表)『国家』VII巻で、教育と関連して幾度も語られる強制が、「洞窟」内の段階では、“強制される者の意志に反してさせる”という意味に解し得るのに対して、「洞窟」の外に出るともはやその意味合いは異なること、それは“受肉した魂の、下を向こうとする傾きに反してさせる”という意味合いに解し得ることを指摘した。また、その内実が多様であるにもかかわらず「強制」という同じ語をプラトンが用いているのは、教育が実に困難であり、かつ、適切になされれば可能であることを強調するためであろうと指摘した。

フィレンツェ大学のフランチェスコ・アデモッロ氏が「プラトンの変化の概念」と題す

る英語講演を行ない(研究発表)。プラトンのうちには、事物(魂やその状態を含む)が瞬間ごとに自己同一性を保ちつつも、それが消滅して次の瞬間にやや違ったありかたをした事物は出現し、という変化概念があることを指摘した。時間を通じての魂の同一性に貴重な光を投げ掛けるものである。

(3)プラトン『法律』において、マグネシア法の「序文」による説得は、法が命じるように振舞い考えるよう市民が説得されない場合、刑罰が待っているという意味で、「説得」の語が往々にして示唆するものと異なっている点を指摘した。この点は『法律』の政治哲学の特徴に光を投げ掛けるだけでなく、死後の魂再配置の説がマグネシアでどう教えられるかにも関わる。この論文は、まず英語版が、国際プラトン学会アジア地域大会で読まれるための審査を通過し、2014年4月、慶應大学日吉にての同大会で読まれ(学会発表)。改訂を経た日本語版が『メトドス』誌に投稿され査読を通過し、2017年、発表された(雑誌論文)。

(3)プラトン『ピレボス』篇の快樂論、つまりは魂論が本格的に始まる31b-36cを徹底的に分析した。本篇でプラトンは快樂の一般理論を提出しているとする解釈が優勢だが、これに反して研究代表者は、本篇の快樂論を導いているのは、魂の身体からの独立性(様々に具体化される)の主題であると論じた。この英語論文はギリシャのスペツェスでの『ピレボス』研究会で、招待を受け、発表された(学会発表)。この研究会で発表された論文の公刊が準備されている。

(4)ギリシャ哲学研究は現代哲学の議論に貢献できるものであることが望ましいと主張、その成功例を、マイルズ・バーニエトのアリストテレス倫理学研究、アリストテレス魂論研究のうち指摘した。いずれにおいてもバーニエトは、現代の通常発想とアリストテレスの発想の大きな相違を指摘するが、アリストテレス倫理学は現代使えるとし、アリストテレス魂論(生命の存在を前提している)は使えないとしており、研究代表者はこの点にも注意を促した。この論文は2016年9月、国際基督教大学にてのギリシャ哲学セミナー共同セミナーのシンポジウム「なぜいまギリシャ哲学か」の提題として発表され(学会発表)。その場での質疑をも踏まえた改訂版が、翌年刊の同学会の『ギリシャ哲学セミナー論集』に収録された(雑誌論文)。

(5)プラトンの「無限」概念をアリストテレス、プロティノス、トマス、クザヌスとの対比を通じて明らかにした。そのさい、無限の一つの場(つまり快苦が生じる場)としての魂が問題化される場面を考察した。新プラトン主義協会でのシンポジウムの提題原稿を改訂したものが、査読を通過し、2015年刊の『新プラトン主義研究』に収録された(雑誌論文)。

(6)プラトン『ピレボス』の快樂論・魂論を、

「主観的・客観的」という多義的概念を軸に考察し、同篇の魂論に独自の視点から切り込んだ。その概念の多義性についてはジョン・マクダウェルの示唆を受けている。本英語論文は、発表のための審査を通過し、2015年4月、米国、エモリ大学での国際プラトン学会中期大会で発表された(学会発表)。

(7)実在論(認知主義)者マクダウェルと反実在論(反認知主義)者ブラックバーンの論争をめくり、マクダウェルの立場に立って、ブラックバーンの立論に疑義を呈する発表を、2016年10月、東京大学(本郷)で開催の哲学会大会で行なった(学会発表)。道徳的実在論は、実在する道徳的性質をプラトンのアイデアと捉えれば、魂不滅説に結びつき、また、道徳的性質をアリストテレスのように非離在的に捉えれば、実在論は魂の部分的滅亡説に結びつく。その意味で、道徳的実在論を検討することは、プラトニックな捉え方とアリストテレス的な捉え方の異同を価値の存在身分に即して押さえるという意味があった。

(8)マクダウェルの倫理学論文集の2論文、現代徳倫理学論文集の1論文を邦訳した(図書 翻訳、図書 翻訳)。特にマクダウェルの「徳と理性」は、重要ながら難解な文章をできるだけ明確に訳した。かつての拙訳(『思想』2008、No. 1011)と較べ、格段に改善されている。

(9)ジョヴァンニ・カセルターノによるプラトン『パイドン』篇についての大部の研究書(ギリシャ語テキスト付き、イタリア語の邦訳・注)を、魂の不滅性についての論述に注目しながら書評した。同篇の魂不死「論証」は文字通りの論証ではなく、それを信じることで立派に生きられるようになる言論であるとする(M・ディクソーに賛同する)著者の主張は慎重な検討に値すると思われた(雑誌論文 書評)。

(10)地震や津波などの天災は神または天が人間に与える罰であるとする説(天罰論)の思想的意味合いを考察した。とくに、天罰論の背景にある神なり天なりへの信仰を共有せず天罰論の「一定の意義」を説くことの浮薄さを指摘し、無信仰の者が宗教的信念を扱うさいの倫理を問題化した(図書)。

(11)エピクロスの哲学について、魂滅亡説も含め、簡潔に紹介した(図書)。

(12)加藤信朗の優れたプラトン研究を総括しながら、研究代表者自身がプラトン研究を進めるなかで、プラトンへの、そして加藤への尊敬を維持しつつも魂滅亡説に赴いた事情などを論じた。加藤信朗米寿記念哲学論文集への寄稿である(図書)。

(13)2017年9月、カリフォルニア大学バークレイ校で開催されたワークショップにて加藤信朗が「プラトン『政治家』篇の統一性に向けて」と題する講演を行なった折に、加藤の古代哲学研究について紹介し、同講演にコメントを行なった(学会発表)。同篇の政

治家がもつ知と、『国家』の哲学者がもつ知の関係などが問題になった。

以上の研究により、西洋古代における魂不滅説・滅亡説、とくにプラトンの魂不滅説の論拠と含意がかなり解明されたものと自負する。

今後は以上の研究成果をふまえ、プラトンにおける魂の原的諸把握の解明に向かいたい。

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計4件)

書評、荻原理、Giovanni Casertano (traduzione, commento e note di), *Platone: fedone, o dell'anima: dramma etico in tre atti*, 査読なし、西洋古典学会、西洋古典学研究、2018、126-129

荻原理、プラトン『法律』における説得、古代哲学会、メトドス、査読あり、XLIV号、2017年、1-13

荻原理、ギリシャ哲学研究と哲学、ギリシャ哲学セミナー論集、査読なし、XIV号、2017、64-74

<http://greek-philosophy.org/ja/files/2017/03/%E8%AB%96%E9%9B%86-2017-%E8%8D%BB%E5%8E%9F.pdf>

荻原理、プラトンらと無限、新プラトン主義研究、査読あり、14号、2015、15-21

[学会発表](計10件)

Francesco Ademollo, Plato's conception of change, Symposium on Plato, 東北大学、2018年1月29日

Satoshi Ogihara, Education-related compulsion in Plato's *Republic*, Symposium on Plato, 東北大学、2018年1月29日

Satoshi Ogihara, On Professor Shinro Kato and on his lecture: 'Toward the Unity of Plato's *Statesman*', Ancient Philosophy Workshop, UC Berkeley, USA, 2017年9月26日

荻原理、ブラックバーンの 'fat' の例をめぐって マクダウェル流の実在論(認知主義)の路線に立って、哲学会第55回研究発表会、東京大学(本郷)、2016年10月29日

荻原理、ギリシャ哲学研究と哲学(シンポジウム「なぜいまギリシャ哲学か 回顧と展望」提題)、ギリシャ哲学セミナー第20回共同セミナー、国際基督教大学、2016年9月18日

Satoshi Ogihara, Immortality and Eternity: Cebes' Remark at *Phaedo* 106d2-4 (revision of ), サンパウロ大学、Brazil, 2016年7月12日(招待)

Satoshi Ogihara, Immortality and Eternity: Cebes' Remark at *Phaedo* 106d2-4, XI Symposium Platonicum

(International Plato Society), Brasilia University, Brazil, 2016年7月5日(審査あり)

Satoshi Ogihara, *Philebus* 31b-36c, PDP meeting, the Anargyrios and Korgialenios School of Spetses, Greece, 2015年9月3日(招待)

Satoshi Ogihara, Plato's *Philebus* and 'subjective-objective' contrast, Internal Plato Society Midterm Meeting: Platonic Moral Realism, Emory University, Atlanta, USA, 2015年3月14日(審査あり)

Satoshi Ogihara, Persuasion in Plato's *Laws*, International Plato Society Asia Regional Meeting: Plato and Rhetoric, 慶應義塾(日吉), 2015年4月27日(審査あり)

[図書](計7件)

Gabriele Cornelli, Thomas M. Robinson, Francisco Bravo (eds.), Satoshi Ogihara et al., Academia Verlag, *Phaedo: Selected Papers from the Eleventh Symposium Platonicum*, 2018 刊行予定(Immortality and Eternity: Cebes' Remark at *Phaedo* 106d2-4). ISBN: 978-3-89665-702-2

G. Cornelli & R. Lopes (eds.), Satoshi Ogihara et al., IPS XI Symposium Platonicum: Plato's *Phaedo*: Papers, 2016, 1083 (753-759: Immortality and Eternity: Cebes' Remark at *Phaedo* 106d2-4)

翻訳、ジョン・マクダウェル(著)、大庭健(編・監訳)、荻原理、他(訳)、勁草書房、徳と理性 ジョン・マクダウェル倫理学論文集、2016、iv + 307 (1-42: 徳と理性、137-165: 倫理学における投射と真理)

翻訳、加藤尚武、児玉聡(編・監訳)、荻原理、他(訳)、勁草書房、徳倫理学基本論文集、2015、342 (295-312: S・D・ワルシュ、目的論、アリストテレス的徳、正しさ)

荻原理、他、慶應義塾大学文学部、極東証券寄附講座 慶應義塾大学文学部 日吉設置総合教育科目 地中海の魅力 2014 地中海の誘惑 2015、104 (53-55: エピクロスの哲学)

土橋茂樹、納富信留、栗原裕次、金澤修(編)、荻原理、他、知泉書館、超越と内在の闘、2015、xii + 289 (55-69: 天罰論をめぐって)

座小田豊(編)、荻原理、他、東北大学出版会、自然観の変遷と人間の運命、2015、xi + 292 (153-168: 加藤、プラトン)

[産業財産権]

出願状況(計0件)

名称:

発明者:

権利者:

種類:

番号:

出願年月日:

国内外の別：

取得状況（計 0 件）

名称：

発明者：

権利者：

種類：

番号：

取得年月日：

国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等 該当なし

#### 6. 研究組織

##### (1) 研究代表者

荻原 理 (OGIHARA, Satoshi)

東北大学・大学院文学研究科・准教授

研究者番号：00344630

##### (2) 研究分担者 なし

( )

研究者番号：

##### (3) 連携研究者 なし

( )

研究者番号：

##### (4) 研究協力者

Ademollo, Francesco